

1 研究の要旨

令和5年度英語教育実施状況調査（文部科学省）によれば、本県の中学校・高等学校において目標とされる CEFR レベル相当以上の英語力を持つ生徒の割合が全国平均を下回っている。言語活動の状況では、小学校・中学校のパフォーマンステスト実施の割合に比べ、高等学校での実施割合が少なく、「話すこと [やり取り]」でその傾向は顕著である。本研究では、「話すこと [やり取り]」のパフォーマンス評価のあり方について小学校・中学校・高等学校教師のパフォーマンステスト（指導と評価）に対する意識や生徒の意識の側面から本校の事例をもとに提案する。

2 研究の概要

- (1) パフォーマンステストがもたらす教師の指導観への影響について調べる。
- (2) パフォーマンステスト及びパフォーマンス評価を中心に据えた指導がもたらす高等学校の生徒への影響を調べる。
- (3) パフォーマンステストでつながる小中高連携プログラムの可能性を探る。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ パフォーマンステストがもたらす教師への影響

場面、状況に応じたより適切な知識・技能の活用や Nonverbal Communication 知識・技能の習得を意識するようになったり、指導改善や学習改善につながる児童・生徒の多面的理解が可能になったり、指導と評価を一体化させた指導観を変化として挙げたりするなどの教師が見られた。パフォーマンステストを設定することは、単元の学習目標から逆算して単元を構成する Backward Design で指導・評価計画を立案する単元構想の指導観を持つことにつながると考える。

○ パフォーマンステストがもたらす生徒への影響

「話すこと [やり取り]」の指導とパフォーマンステストを一体化して行うことは、生徒の英語学習において、より内発的で自己決定的な動機づけになること、また、外国語の習得に継続して取り組む主体的・自律的な態度の育成につながる可能性を持つことが明らかになった。

○ 小中高連携の可能性

英語学習が始まる小学5年生から高等学校までの8年間を、同様の手立てを共有し発達段階・学習段階に応じて活動を継続・発展させていくことは、大いに有効である。小学校—高等学校で連携した Teaching Assistant program のような交流の経験は双方にとって利点があった。

(2) 今後の課題

○ 小学校—中学校—高等学校でバトンがつながるような言語活動、パフォーマンステストをさらに協働的に模索していきたい。

○ パフォーマンステストの評価の仕方（ルーブリック、妥当性と信頼性、真正性）をさらに研究したい。